

ひたちなか 埋文だより 50



トシコ 全長不明・重量不明

鹿嶋市津賀城跡
97.1mm・122.4g

茨城町宮後遺跡
110.5mm・203.9g

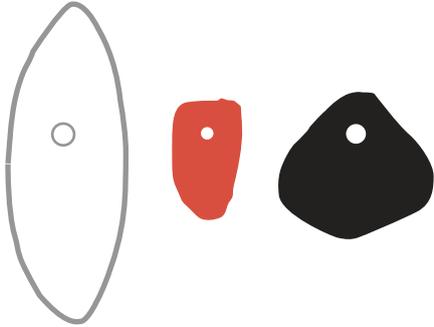
常陸大宮市坪井上遺跡 86.3mm・103.4g

企画展「縄文人と装身具」の翡翠製大珠 企画展のために茨城県北部を中心として、遺跡から出土した翡翠製大珠を集成しました。穿孔のある幅広の面が表面として展示され、写真や図が書籍に掲載されることも多いのですが、実際に紐を通して懸けると、細長い側面が正面を向きます。大珠を観察してみると、一方の側面にのみ光沢を有するものをいくつも見出しました。身体に向いた面が衣類との接触で摩耗したのでしょうか。あるいは、他者に見える面だけを入念に研磨したのか、気になるところです。
(2019.2.2 「トシコ」第2弾)

CONTENTS	第16回企画展 縄文人と装身具 ー茨城県北部の資料集成ー		
	公開講座「ひたちなか市の考古学」第12回 縄文時代の玉(ぎょく)		
	「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第22回/最終回 夢未央 (川崎純徳)		
	資料紹介 三反田のベンケイガイ ー貝輪着装人骨と貝輪土製模造品ー (鈴木素行)		
	横穴墓を歩く② 赤羽台横穴墓群 (鈴木直人)	1ケース・ミュージアム 47	古墳時代の杯
	ひたちなか市内の発掘調査 2018	ひたちなか市の遺跡③改訂版 勝田一中学区編②	
	歴史の小窓② 災いを払うための代価	虎塚古墳花便り② ウラシマソウ	ほか

縄文人と装身具

—茨城県北部の資料集成—



第16回企画展

2019年2月9日(土)～5月6日(月)

縄文人と装身具

—茨城県北部の資料集成—

2019年2月9日(土)～5月6日(月)

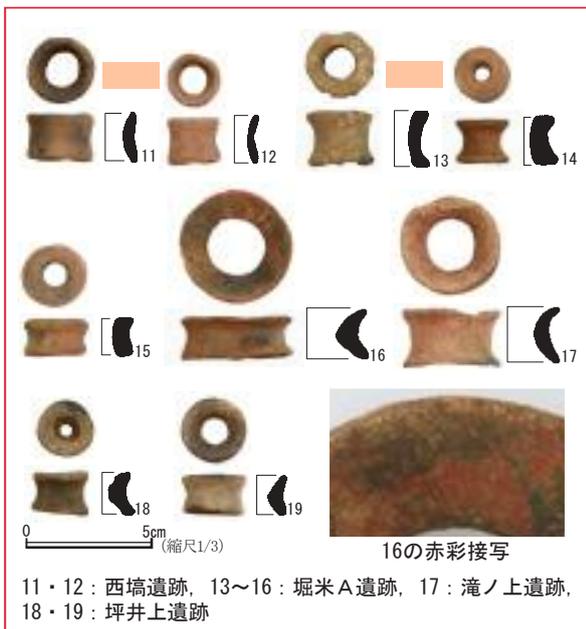
ひたちなか市縄文文化財展示センター 入場無料
〒312-0011 ひたちなか市中華 3499 No.029-276-8311

休館日：月曜日（ただし祝日の場合は翌日が休館）
開館時間：9：00～17：00（入館は16：30まで）

第16回企画展
（主催）ひたちなか市教育委員会、文化・スポーツ公社

埋葬と装身具 装身具が身体の中の部位に着装されたのかは、埋葬人骨に伴う事例から研究が進められてきました。これにより、貝塚など人骨を保存する条件を持たない遺跡では、装身具が出土した遺構に埋葬を想定することができるともなります。縄文時代中期には、装身具を出土した土坑に大きく二つが見られます。土坑の一つは、フラスコ状土坑などと呼ばれ、貯蔵穴として掘削された土坑を埋葬に転用したものです。鹿嶋市鍛冶台遺跡SK08からは、二体の埋葬人骨が検出されています。人骨のNo.1は覆土中層、No.2は底面付近に埋葬されていました。完形の土器はNo.2に伴うものかもしれません。水戸市十萬原遺跡SK550Bは、完形に復元される土器が出土した下位から大珠が出土しました。人骨は残されていませんが、大珠を着装した埋葬が想定されます。土坑のもう一つは、墓穴として掘削されたもの。東海村堀米A遺跡では、屈葬の姿勢が想定される規模と形態のSK236・299などから、耳飾りが出土しています。これに対して、翡翠製大珠を出土した茨城県宮後遺跡SK1は長軸が2.7mと大きく、堀米A遺跡SK240・253などもこれに相当するような規模になりそうです。茨城県北部では、耳飾りと大珠が共存することはないので、着装者を異にしていたことが考えられます。大珠を身に着けたのは、集落の長のような存在であったのかもしれませんが。

耳飾りの変遷 茨城県北部における装身具のうち耳飾りについて変遷を見ておきましょう。



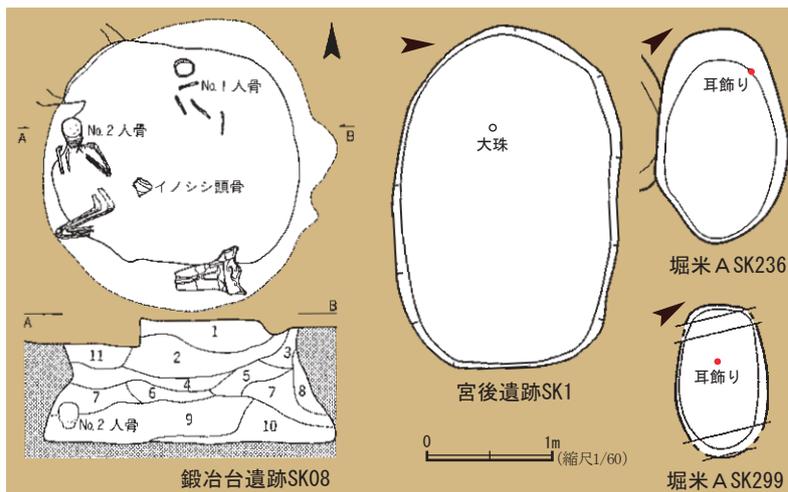
滑車形耳飾り（11・12、13・14 はそれぞれ同一土坑出土）



珠状耳飾り（3・7・8は土製，他は石製）



十万原遺跡SK550B (写真提供: 茨城県教育財団)



* 鍛冶台遺跡SK08のNo.2屈葬人骨が埋葬施設としての土坑の大きさを見るスケール

装身具と埋葬遺構 (実測図のほとんどは各遺跡の報告書から加筆して引用 他図についても同じ)

耳飾りであることが確実な最古の形態は、球状耳飾りと呼ばれています。環状の一部に切目を入れたもので、中国の玉器「瑛」に似ていることから名称が付けられました。つくば市上野古屋敷遺跡SI153には、早期末に遡るものが出土しており、県北部では、これに似た断面形状の山崎遺跡が古いと考えられますが、採集されたものであるため時期を確定できません。前期前葉は、日立市砂沢遺跡、遠原貝塚SIJ7など裏面が平坦で断面が蒲鋒形。前期中葉・後葉は、遠原貝塚など断面がレンズ状か扁平が典型で、前期前葉の滝ノ上遺跡も断面が扁平です。これらは石製も土製も、全体を円盤形に整形した後に穿孔し、擦切るようにして切目を入れるのを基本としますが、日立市割山古墳群は、断面形状もさることながら、「糸切り」により切目を入れることが著しく異なっています。前期中葉・後葉の県南部には、石岡市東大橋逆井遺跡、土浦市壺杯清水西遺跡など、断面が滑車形で、赤彩された球状耳飾りが見られます。

前期中葉の県北部では、特に堀米A遺跡の調査により、断面が滑車形の環状耳飾りを典型とすることが明確になりました。常陸大宮市西塙遺跡のSK004、堀米遺跡のSK212からは二点が検出され、これらは左右の耳を飾った一对のものと考えられます。赤彩されたものが多く、観察してみると、報告に記載がないものにもわずかながら赤彩の痕跡が見出せます。翡翠製大珠の大型品は、ほとんどが前期中葉のもので、この時期の県北部には、東北地方南部の「大木式」



* 24・27・30・31以外は各遺跡の報告書より引用。

20: 君ヶ台遺跡, 11・30: 滝ノ上遺跡, 22・25・26・29: 十王堂遺跡, 23: 堀米A遺跡, 24・31: 上の内遺跡, 27: 三反田蛭塚貝塚, 28: 宮後遺跡



糸巻形(大畑系列)土製耳飾りの分布 (分布図は上野1995をもとに茨城県域の資料を追加して作成)

上野修一 1995 「大畑系列」土製耳飾小考『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集刊行会

*左側面には光沢があり、右側面には光沢がない（1頁参照）



垂飾り — 翡翠製大珠と琥珀製珠 —

系統の土器が分布し、大珠は、翡翠原産地の北陸地方から「大木式」の地域を経路として運ばれてきたと考えられます。翡翠は緑という印象が強いのですが、大部分は白色で、これに緑が混じります。この時期は、耳飾りが赤、珠が白ということになります。

中期後葉になると、栃木・茨城両県の北部に断面形状が糸巻形で中実の「大畑系列」と呼ばれる耳飾りが出現します。君ヶ台遺跡では、文様面に白色の付着物が観察されました。観察してみると、日立市十王堂遺跡の一点にも、文様面の沈線に白色が残っていました。これらには、貝輪土製模造品と同じく、白彩されていたことが考えられます。また、全てに赤彩の痕跡は見出せませんでした。琥珀製珠は、ほとんどが中期後葉のもので、この時期の県北部には、関東地方南部の「加曾利E式」系統の土器が分布し、珠は、琥珀原産地の千葉県域から「加曾利E式」の地域を経路として運ばれてきたと考えられます。前代とは逆転し、耳飾りが白、珠が赤という配色になります。

中期末からは再び滑車形の環状耳飾りが典型となり、晩期まで続きます。但し、関東地方南部のような装飾の発達や数量は見られず、総じて小振りなものばかりです。

その他にも髪飾り、腕飾り、胸（頸）飾り等を集めています。また、ツノガイやサメ歯については、素材としての化石の利用を、化石の標本と比較できるように並べて展示しました。

(鈴木素行)



白彩の痕跡（貝輪土製模造品と糸巻形耳飾り）
*貝輪と貝輪土製模造品については14-18頁参照

垂飾り — サメ歯化石とサメ歯土製模造品 —



1. 北海道千歳市美々4遺跡
北海道立埋蔵文化財センター所蔵
縄文時代後期後葉
ユウパキディスカス・ハラダイ
(*Eupachydiscus haradai*)



2. 北海道千歳市末広遺跡 千歳市教育委員会所蔵
縄文時代後期後葉
ユウパキディスカス・ハラダイ
(*Eupachydiscus haradai*)



3. 北海道芦別市滝里11遺跡 芦別市教育委員会所蔵
縄文時代晩期末～続縄文時代初頭
アナゴウドリセラス・サキア (*Anagaudryceras sacya*)

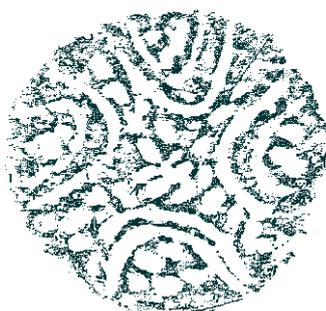


4. 北海道江別市「江別兵村」北海道大学植物園・博物館所蔵
続縄文時代
ゴウドリセラス・リマタム (*Gaudryceras limatum*)



5. 青森県鮭ヶ沢町「鮭ヶ沢」京都国立博物館所蔵
縄文時代晩期カ
ムカシオオホホジロザメ

化石利用の参考図 遺跡出土のアンモナイトとムカシオオホホジロザメの垂飾り



今回の企画展の開催及び本誌への資料の掲載にあたっては、下記の機関及び関係者からご指導とご協力をいただきました。(50音順、敬称略)

芦別市教育委員会、茨城県教育財団、茨城県立歴史館、茨城町教育委員会、大洗町教育委員会、鹿嶋市どきどきセンター、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、京都国立博物館、高萩市歴史民俗資料館、千歳市教育委員会、東海村教育委員会、栃木県教育委員会、とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、常陸太田市教育委員会、常陸大宮市歴史民俗資料館、日立市郷土博物館、北海道大学植物園、北海道埋蔵文化財センター、水戸市埋蔵文化財センター、美浦村文化財センター。猪狩俊哉、石橋美和子、大滝駿介、小川貴行、加藤 克、川津法伸、瓦吹 堅、倉橋直孝、黒澤春彦、近藤裕子、坂本尚史、関口慶久、長谷山隆博、高橋由希子、高谷文仁、豊田宏良、中村哲也、長瀧豊和、長沼 孝、馬場信子、林 恵子、一木絵理、宮川禎一、柳瀬由佳、矢野徳也、綿引逸雄、和智美千世

公開講座「ひたちなか市の考古学」第二回

縄文時代の玉(ぎょく)

二〇一九年二月九日から三月二日の毎週土曜日に、公開講座を開催しました。第九回「縄文時代の剣」に続く、「縄文時代の玉」です。現代にも通じるような装身具が縄文時代の遺跡から出土しています。石・土・骨・角・牙・貝などを素材に製作された当時の装身具を、考古学の手法で分析した研究についてご紹介いただきました。後日に、講座の記録集を刊行する予定です。



月/日	演 題	講 師
2/ 9 (土)	縄文時代の装身原理	国立歴史民俗博物館 山田 康弘 氏
2/16 (土)	縄文時代の装身具 —大珠と耳飾りを中心に—	なす風土記の丘資料館 上野 修一 氏
2/23 (土)	幻の貝 オオツタノハを追う—考古学・生物学調査から見えてきた縄文・弥生社会—	市原市教育委員会 忍澤 成視 氏
3/ 2 (土)	絶滅巨大鮫メガロドンの垂飾り —装身具の色彩と模造—	ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 鈴木 素行



市原市教育委員会
忍澤 成視 氏



なす風土記の丘資料館
上野 修一 氏



国立歴史民俗博物館
山田 康弘 氏

「生物学の人と考古学の人と、真向から対立して埒(らち)が明かないんです。現生貝調査をちゃんとやっていない、不十分だというのが越えられない大きな要因だと思いました。私はこれを十分調査すればなんとかなる、伊豆諸島南部に生息するということを突き止めればよいのだと、これを単独で行いました。そして、2007年八丈島、2008年三宅島、2009年御蔵島と、立て続けにでっかいオオツタノハをゲットしたのです。」

「八剣遺跡という壬生町の遺跡を掘ったことがあるのですが、いろんな所が弾けたように割れた硬玉製大珠が出土しました。表面が荒れていたので、玉の表面をルーペで観察したら、焼いて剥離したり、ヒビの間に水などが入って剥がれた状態なんですね。いやあ、うれしかったです。ついに見つけたんですよ、自分で。」

「僕は今指輪をしていますけれども、指輪を左手の薬指にはめるということには、社会的な意味がありますね。このことからわかるように、装身具というものは、非常にメッセージ性の強いものなんです。それを付けているということで様々な意味を自分に向けて、あるいはほかの人に向けて発信する。そういう資料なんだということを、まずは皆さんにご理解いただきたいと思います。」

災いを払うための代価

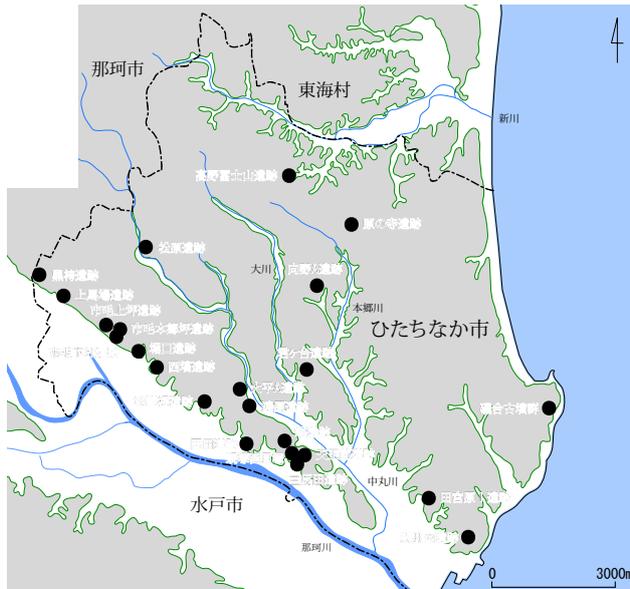
歴史の小窓 その二二



武田西境遺跡の発掘調査では、一〇世紀前半の第六三号住居跡から、縦九センチほどの鍬(くわ)・鍬先形鉄製品が出土しました。鍬先としては、大きさが小さすぎますが、つくりはきちんとしているので、実用品?と首をかしげながら報告したことをおぼえています。

それから一六年ほどたった昨年(二〇一七)のこと、『たたら研究』特別号で、「古代の小型U字形鉄製品」という論文が発表されました。その論文によると、小型鍬・鍬先は、祭祀具として用いられたようです。第六三号住居跡では、小型鍬・鍬先といった貴重な鉄製品とともに、貴重な灰釉(かいゆう)陶器の碗も出土しています。おそらく平安時代の人々は、強い願いに見合った代価を神にささげたのでしよう。一緒に出土した多くの土器のなかに、「宴」と墨書されたものがありました。祈祷の後、人々は厄払いの宴を開き、今後のことを話し合ったのかもかもしれません。(佐々木義則)

参考文献 安間拓巳「二〇一七『古代の小型U字形鉄製品』『たたら研究』特別号



三反田遺跡の第8次調査

みただ
三反田遺跡

は、ひたちなか市立三反田小学校のあたりに広がる古墳時代前期を中心とする集落遺跡です。1973年から1990年にかけて5回の発掘調査、2017年に試掘調査が行なわれており、その成果は発掘調査報告書にまとめられ刊行されています。

さて、2018年も昨年の第7次調査に続き、7月から9月にかけて、校舎の建て替えに伴う三反田遺跡第8次発掘調査が実施されました。

校舎が建っていたところは、建物の基礎などにより壊されていたため遺跡は残っていませんでしたが、花壇などがあった部分では、予想外に遺構がよく残っていました。

発掘調査によって、古墳時代前期の竪穴住居跡が4基、古墳時代前期の方形周溝墓が3基見つかりました。とくに方形周溝墓は、これまでの三反田遺跡の調査では見つからないため、今回の大きな成果になりました。また、住居跡や方形周溝墓も、過去に調査された住居跡より古い土器が出土しているので、古墳時代前期の集落の展開に新たな手掛かりを得られた調査となりました。

第7次・第8次と続けて実施された発掘調査の貴重な成果は、発掘調査報告書として2019年3月に刊行され、市内の図書館で見ることができます。

二〇一八年度は、ひたちなか市内において、試掘調査三三件、本調査七件を実施しました。
馬渡地区の向野A遺跡では、現在の細い道に沿うように幅二mの溝跡を確認しました。その溝跡の脇の細い道は、地元で「鎌倉街道」と伝承されていた道です（飛田英世「ひたちなか市の鎌倉街道」『常総中世史研究』第六号）。現地では調査した溝跡から南西方向にくぼんだ地形が続いていることが確認できます。おそらく向野A遺跡の溝跡は、「鎌倉街道」といわれる古道の側溝ではないでしょうか。古道の延長上に位置する向野D遺跡や向野E遺跡では、並行する二本の溝跡が調査されていますが、これも古道の側溝になるのかもしれませんが。（佐々木義則）



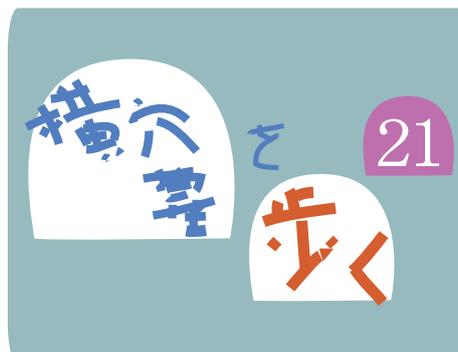
向野A遺跡の溝跡



三反田小学校児童の皆さんへ説明中

2018（平成 30）年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	回数	所在地	種別	時期	遺構・遺物
1	高野富士山遺跡	12 次	高野	試掘	4 月	住居跡 1 基(古墳), 土坑 1 基, ピット 4 基を確認。須恵器, 土師器が出土。
2	磯合古墳群	4 次	磯崎	試掘	4 月	古墳 1 基を確認。土師器が出土。
3	浅井内遺跡	2 次	浅井内	試掘	4 月	溝 1 条を確認。
4	天王前遺跡	6 次	三反田	試掘	5 月	溝 2 条, 土坑 4 基を確認。縄文土器, 土師器, 須恵器, 瓦質土器, 陶器が出土。
5	遠原遺跡	5 次	金上	試掘	5 月	住居跡 5 基(古墳 3, 時期不明 2), 土坑 2 基, ピット 4 基を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 石器が出土。
6	岡田遺跡	32 次	三反田	試掘	5 月	なし
7	岡田遺跡	33 次	三反田	試掘	5 月	住居跡 4 基(弥生 2, 時期不明 2), 土坑 2 基を確認。須恵器, 土師器, 弥生土器が出土。
8	市毛上坪遺跡	21 次	市毛	試掘	5 月	住居跡 3 基(古墳 3)を確認。須恵器, 土師器, 弥生土器が出土。
9	浅井内遺跡	3 次	浅井内	試掘	6 月	ピット 1 基を確認。
10	向野 A 遺跡	5 次	馬渡	試掘	6 月	溝 1 条を確認。
11	黒袴遺跡	7 次	津田	試掘	6 月	なし
12	峪遺跡	1 次	三反田	試掘	6 月	溝 1 条, 土坑 8 基, ピット 7 基を確認。縄文土器, 土師器, 須恵器, 瓦質土器が出土。
13	市毛上坪遺跡	22 次	市毛	試掘	6 月	住居跡 4 基(弥生 1, 古墳 3)を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
14	市毛本郷坪遺跡	9 次	市毛	試掘	7 月	住居跡 11 基(古墳 3, 平安 1, 時期不明 7), 溝 1 条, 土坑 2 基を確認。縄文土器, 土師器, 須恵器, 中世土器が出土。
15	西端遺跡	12 次	武田	試掘	7 月	なし
16	君ヶ台遺跡	12 次	中根	試掘	7 月	なし
17	原の寺遺跡	1 次	足崎	試掘	8 月	なし
18	市毛上坪遺跡	23 次	市毛	試掘	8 月	住居跡 3 基(古墳), 土坑 2 基を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器が出土。
19	市毛上坪遺跡	24 次	市毛	試掘	8 月	住居跡 4 基(奈良・平安), ピット 2 基を確認。土師器, 須恵器が出土。
20	三反田遺跡	8 次	三反田	本調査	9 月	住居跡 4 基(古墳), 方形周溝墓 3 基, 石組 2 基, 溝 4 条, 道 1 条を調査。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 石器が出土。
21	堀口遺跡	29 次	堀口	試掘	9 月	住居跡 8 基(古墳 3, 奈良・平安 4, 時期不明 1)を確認。土師器, 須恵器が出土。
22	天王前遺跡	7 次	三反田	試掘	9 月	溝 1 条を確認。縄文土器が出土。
23	市毛上坪遺跡	25 次	市毛	本調査	10 月	住居跡 5 基(古墳), 溝 1 条, 道 1 条, 土坑 2 基を調査。弥生土器, 土師器, 須恵器, 陶磁器, 石器, 鉄製品が出土。
24	市毛下坪遺跡	14 次	市毛	試掘	10 月	住居跡 6 基(平安), 溝 1 条, 土坑 3 基を確認。土師器, 須恵器が出土。
25	岡田遺跡	34 次	三反田	試掘	10 月	住居跡 6 基(奈良・平安), 溝 1 条, 土坑 1 基を確認。土師器, 須恵器が出土。
26	岡田遺跡	35 次	三反田	本調査	11 月	住居跡 2 基(古墳 1, 平安 1)を調査。弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器が出土。
27	君ヶ台遺跡	13 次	中根	試掘	11 月	なし
28	地藏根遺跡	4 次	勝倉	試掘	11 月	住居跡 2 基(時期不明), 溝 1 条を確認。
29	松原遺跡	6 次	田彦	試掘	11 月	縄文土器が出土。
30	田宮原 I 遺跡	1 次	田宮原	試掘	11 月	なし
31	市毛上坪遺跡	26 次	市毛	本調査	12 月	住居跡 4 基(古墳)を調査。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 銅製品, ガラス小玉が出土。
32	市毛下坪遺跡	15 次	市毛	試掘	12 月	溝 1 条を確認。土師器が出土。
33	市毛下坪遺跡	16 次	市毛	試掘	12 月	土師器, 須恵器が出土。
34	市毛下坪遺跡	17 次	市毛	試掘	12 月	溝 1 条を確認。土師器, 須恵器が出土。
35	市毛上坪遺跡	27 次	市毛	本調査	1 月	住居跡 4 基(古墳), 溝 1 条を調査。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 土師質土器, 石器, 鉄製品が出土。
36	市毛下坪遺跡	18 次	市毛	試掘	1 月	住居跡 4 基(平安 1, 時期不明 3), 溝 5 条を確認。土師器, 須恵器が出土。
37	市毛上坪遺跡	28 次	市毛	本調査	2 月	住居跡 4 基(古墳 2, 平安 2), を確認。土師器, 須恵器, 鉄製品が出土。
38	向野 A 遺跡	6 次	馬渡	試掘	2 月	なし
39	蛸塚西貝塚	1 次	三反田	試掘	2 月	縄文土器, 土師器が出土。
40	大平 A 遺跡	5 次	大平	試掘	3 月	溝 1 条を確認。



東京都北区
あかばねだい
赤羽台横穴墓群

鈴木 直人
(北区飛鳥山博物館)

赤羽台横穴墓群はJR京浜東北線赤羽駅の北北西七五〇m、東京都北区赤羽台四丁目の八幡神社敷地内および星美学園敷地内で、一九八二年から一九八四年にかけて行われた東北新幹線の敷設工事に伴う発掘調査で発見されました。横穴墓群は武蔵野台地を刻む小支谷の南東側斜面に立地しており、台地上には旧石器時代から近現代にいたる複合遺跡の赤羽台遺跡があります。

横穴墓は標高二〇〇mほどの台地の斜面地の、一二〜一八mの高さにはほぼ直線的に19基確認されました。19基は九〇mの範囲にはほぼ等間隔に配置されていました。横穴墓の構造は基本的には長方形のやや長い前庭部をもち、短い羨道を通じて玄室に至るものです。玄室の平面系は正方形や長方形が多く、徳利形とくりのものが一例だけあります。天井の形態はいずれもやや扁平なアーチ形をしています。大きさでは玄室長が九五cmしかない小型の

ものもあります。遺物はほとんどなく、9号横穴墓の前庭部から底部をわざと打ち欠いた須恵器の長頸壺ちやうけいこが一点と、14号横穴墓の前庭部から須恵器の蓋ふたが一点出土したのみです。このことから赤羽台横穴墓群がいつごろどのような順序で構築されたかは不明な点が多いのですが、形態的特徴や他地域との関連からおおむね七世紀後半から八世紀にかけて造営されたことが推測されています。

遺物の少なさは裏腹に人骨の遺存状態は良く、多くの横穴墓からさまざまな状態で出土しました。解剖学的配置を保ったままのものは仰臥伸展葬ぎやうがしんてんそうでした。他には追葬のために脇に寄せられた集骨があり、さらには骨の一部しか存在しないものもありました。これは改葬とよばれるものです。先に挙げた小型の8号横穴墓はその大きさから小児用かと思いきや、中から大人の四肢骨ししこつが縦に並べられていました。

最後にこの赤羽台横穴墓群の造墓集団とはいったいどんな人たちだったのでしょうか。そこで注



赤羽台横穴墓群の近景



赤羽台9号横穴墓の入口



赤羽台11号横穴墓の玄室

目されるのは、玄室床面に貝が敷き詰められているものがあるということです。いわゆる「貝床」かいしょうですが、これをもつ横穴墓は房総半島の富津周辺と海をはさんだ西側の三浦半島に多く見られます。こうした地域が赤羽台横穴墓群に葬られた人たちのふるさとなのでしょうか。また、先に挙げた赤羽台横穴墓の構造的特徴は、実は十五郎穴横穴墓群の一部のそれとよく似ています(註1)。中には多摩川下流域の特徴(平面形徳利形)を持つものもあるのですが、それ以外は常陸北部の特徴です。その特徴が近距離のものよりも遠距離のものの方が多くを占めるということは、偶然ではなく強い関わり合いがあったものと思われれます。造墓職人を呼んだのでしょうか。でもそれはなぜなのでしょう。遠く離れた二つの地域との関係はまだ解決できていない赤羽台横穴墓群の謎です。

註1:「古屋記之二〇七」赤羽台横穴墓群の再検討―常陸北部系横穴墓との系譜関係を中心に―「北区飛鳥山博物館研究報告」第九号

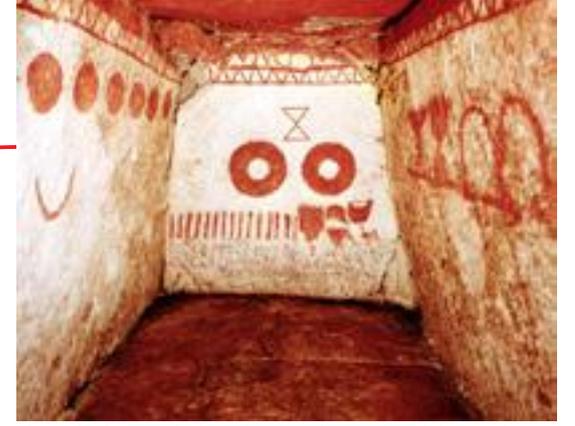


後期の遺跡
った貝塚の
あります。

約 800 年前
平安時代



東中根の台地上には、堂山・大和田・清水遺跡など弥生時代後期の集落跡が点在しています。これらの遺跡から出土した土器は「東中根式」と呼ばれています。



虎塚古墳の死者を埋葬する部屋（石室）には、上の写真のように、赤い色で丸や三角等の文様が描かれています。



十五郎穴横穴墓群は、崖面を横に掘り込んで造ったお墓です。現在までに 274 基の横穴墓が見つかっています。2011 年度の調査では、未開口の横穴墓からたくさんの土器や大刀などが出土しました。

ひたちなか市の遺跡3 (勝田一中)

勝田一中学区には、現在、83の遺跡がみつかっています。この数は市内でもっとも多い数です。今回紹介する中根小・長堀小学区は、中丸川の北側の地域で、37の遺跡があります。この中には、旧石器時代の後野遺跡、縄文時代の君ヶ台貝塚、弥生時代の東中根遺跡群、古墳時代の虎塚古墳や笠谷古墳群、古代の十五郎穴横穴墓群といった、ひたちなか市の各時代の有名な遺跡が存在しています。

遺跡の発掘調査は1950年代から行われており、2017年までに76回実施されています。重要な調査としては、虎塚古墳の壁画発見があります。壁画発見時には、1日で1万2千人を超える見学者が訪れました。虎塚古墳は1974年に国指定文化財になっています。この他にも十五郎穴横穴墓群は県の指定史跡に、後野遺跡から出土した石器・土器と、東中根遺跡群から出土した土器は、県の指定文化財になっています。

2017年までに発掘調査された住居跡の数
 中根地区：60基 長堀地区：8基
合計：68基

2017年までに発掘調査された遺跡 (地図上の●印)
 中根地区：虎塚古墳群、十五郎穴横穴墓群、館出遺跡、指洪遺跡、東中根遺跡群、野沢前遺跡、北谷遺跡、北谷北遺跡、中根中区古墳群、下原遺跡、君ヶ台遺跡、君ヶ台貝塚、後野遺跡、笠谷古墳群
 長堀地区：柴田遺跡、枯松戸遺跡、小砂遺跡、宿ノ内遺跡、西中根遺跡、殿塚古墳群、宮前遺跡



後野遺跡は、旧石器時代から縄文時代への過渡期にあたる時代の遺跡です。東北地方が原産の頁岩で製作された石器に、日本最古の土器のひとつ「無文土器」が伴います。



宿ノ内遺跡からは、遺体を火葬にして骨を入れた壺が出土しています。時代は平安時代です。このような骨壺は、市内で5遺跡からしか見つかっていません。



君ヶ台貝塚は、縄文時代の中～後期です。上の写真は、斜面に積もった断面の様子です。厚さは約5mです。



十五郎穴の保存・整備に心血を注いでいた小林三郎さんが亡くなり、ひたちなか市史跡保存対策委員会は大きな転換の時期を迎えた。小林さんに前後して地主の西野茂男氏、国立文化財研究所の江本義理、門倉武夫さんが相次いで幽明境を異にされた。小林さんの後、十五郎穴は史跡保存対策委員会の審議の対象から外れ議題の中心は虎塚古墳壁画に移った。十五郎穴と虎塚古墳の一体的保存・活用は口にする事が無くなった。五年前に筆者は、教育委員会には指定に向けての環境整備を、史跡保存対策委員会には史跡指定を阻んでいる問題について市当局との協議を提案した。しかしどちらも不発に終わった。平成二八年に石岡市瓦塚遺跡、常陸大宮市泉坂下遺跡が国史跡に指定されたが、十五郎穴は議題に上がることもなく退場を余儀なくされた。同時に筆者もこの問題から退場を決めた。

勝田市史編さん事業は終了したが、十五郎穴の指洩支群が調査後に当面の保存対策としてシートに覆われたままになっている。シートを取り除けば露出した横穴墓が風雨により崩壊する恐れがある。全体的に十五郎穴は凝灰岩のために軟弱である。抜本的な保存対策が必要なのであり、その為に様々な角度から検討され、実験も積み重ねられてきた。このエリアを史跡に指定した上で公有化し、整備を行うことが問題解決の近道なことは明らかである。十五郎穴はその後の発掘調査で、館出、笠谷、指洩の広大な台地に営まれたことが明らかとなり、その面

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第22回／最終回 夢未央

プロフィール

1938（昭和13）年茨城県水戸市生まれ。明治大学文学部史学地理学科卒。
1963（昭和37）年より1998（平成10）年まで茨城県内公立高校教諭。
2010（平成22）年瑞宝双光章を叙勲。現在、ひたちなか市文化財保護審議委員会会長、ひたちなか市史跡保存対策委員、常陸大宮市泉坂下遺跡保存委員会座長、茨城県考古学協会顧問等。主な著書『原始古代の茨城』『茨城県の装飾古墳』等。



川崎 純徳

積はおそらく日本列島最大級とも推定されている。またそこに構築された横穴墓の総数は五〇〇基以上と推定され、これも日本最大級なのである。出土品（副葬品）も一級品揃いであり国の史跡としての価値は十分にある。余りにも広大なために整備には問題が多い。しかし活用のためには、虎塚古墳とともに一体的整備は必要である。虎塚古墳の特別史跡、十五郎穴横穴墓群の国史跡指定は究極の選択になるのであるが、問題点の整理が追いつかない。この台地には、虎塚古墳、十五郎穴のほか笠谷古墳群が存在している。これら性格の異なる遺跡は時期が重なって営まれたことが推測されており、古代地域史の上での大きな問題でもあるのである。

史跡の整備は簡単な問題ではない。桜川市真壁城跡でも史跡整備が開始されて二六年が経つが整備はまだ半分も終わっていない。十五郎穴はそれ以上の期間がかかるであろう。筆者の史跡保存と活用の最終到達点として虎塚古墳・十五郎穴横穴墓群の整備があるが、もはや夢に近い。しかし逃れることが出来ないのは、これらの遺跡群がひたちなか市に存在していると言う事である。市民のため有益な活用を展望して、この宝を何とかしたい。それゆえに市だけの問題にしておくのではなく、よりよい方向を県も国も考えるべきである。筆者は一度退場を決めたが、考えを述べる機会があれば話してみたいと思っている。文化財問題の夢物語でもある。



二〇一七年度に調査した遺跡は、試掘調査二四件と本調査四件です。今回はその中から市毛上坪遺跡を取り上げました。

市毛上坪遺跡では、古墳時代中期の住居跡から、完形の杯が床面に置かれた状態で多量に出土しました。このほかにも、市内の鷹ノ巣遺跡や本郷東遺跡でも完形の杯が並んだり、重なった状態で出土しています。展示ではこれらの古墳時代の杯が多量に出土した例をご紹介します。

市毛上坪遺跡の杯

市毛上坪遺跡第一九次調査では、古墳時代の第一号住居跡の床面と貯蔵穴から、多くの杯が完形の状態でも出土しました。出土した場所は、一箇所に偏らず、住居全体です。貯蔵穴の出土状況からは、貯蔵穴に木製の蓋があり、そこに杯が置かれていたと思われる状況でした。これらの杯の底は平たい面をもち、五世紀後半のもの

のと推定されます。

鷹ノ巣遺跡の杯

第七七号住居跡からは、ほとんど壊れていない杯が重なった状態で出土しました。出土した場所は、住居の出入口付近です。これらの杯は、六世紀中頃のものと推定されます。市毛上坪遺跡と比較すると、平底ではなく丸底になり、赤色や暗褐色の杯に変化しています。

本郷東遺跡の杯

第三号住居跡からは、多くの杯が重ねられた状態で出土しました。杯の数は二一個もあります。出土した場所は、住居の北西隅です。これらの杯は、七世紀前後のものと同推定されます。鷹ノ巣遺跡と比べて、赤色の土器がなくなり、暗褐色や黒色の土器だけとなります。

今回の展示しました三例は、完形の杯が多量に出土した珍しい例です。時期も古墳時代中期後半から後期後半と一時期ではあ

りません。このほかにも、鷹ノ巣遺跡第二八号住居跡で入口付近に完形の杯が横に並んで置かれていた例があります。

以上四つの例では、すべての住居跡が火事になっていくという共通点があります。入口付近に杯を並べている状況からは、住居廃絶の際に人為的に火をつけている可能性が高いと考えられます。

時期と遺構の性格が異なりますが、十五郎穴横穴墓群の横穴墓の入口にも、多量の土器が置かれる例があります。このような墓の事例と関連があるのか、検討が必要です。

(稲田健二)



市毛上坪遺跡第1号住居跡



本郷東遺跡第3号住居跡



鷹ノ巣遺跡第77号住居跡



横穴墓の入口に置かれた土器



鷹ノ巣遺跡第28号住居跡

三反田のベンケイガイ

- 貝輪着裝人骨と貝輪土製模造品 -

鈴木 素行



図1 三反田蜆塚貝塚の貝輪着裝人骨

展示ケースに公開されている三反田蜆塚貝塚の貝輪着裝人骨は、発掘から既に60年が経ちます。貝輪は、ベンケイガイを素材に製作され、左腕に13点が着裝されていました。修復保存された現状に至るまでを検証し、多数の貝輪が整列して残されている理由を考えてみました。それには、貝輪を模造した土製品が大きな手掛かりとなります。

1 貝輪着裝人骨の発掘から修復まで

貝輪を着裝した人骨は、藤本弥城・武による三反田蜆塚貝塚の発掘で検出されたものであり、それは一九六八（昭和四三）年八月一七日のことと記載されている（藤本一九七七）。「A区において表土の耕土を30cm除去すると貝殻の少ない厚さ60cmの混土貝層があり、加曾利B式の土器破片が多く出土し、貝層下の黒褐色土層中で、頭骨、脊椎骨の消失した伸葬の第四号人骨を発掘し、この人骨の左前腕部にはベンケイガイ製による貝輪一三個が装用されてあったが、周辺の土質等には何等の変化はみとめられなかった」。この第四号人骨については、弥城により「左臑骨の所見（引用註二「大坐骨切痕は大きく広い」）及び左上腕骨三角筋の粗面の弱いところよりみて、女性（成人）」と推定されている。検出状況の写真は掲載されたが、一三点の貝輪の詳細については報告に記載がなかった。

一九八六（昭和六二）年に、弥城から勝田市（現・ひたちなか市）に寄贈された資料は、「藤本弥城先史資料」と名付けられた。三反田蜆塚貝塚の第四号人骨も含まれており、それは貝輪を着裝した状態のまま保存されていた。貝輪の詳細が記載されなかったのは、貝輪を人骨から取り外さなかったことによると理解されたのである。一九九四（平成六）年度に、市埋蔵文化財調査センターでは、これを展示資料として活用するため修復保存を外部（株式会社芸匠）委託で実施した。担当の住谷光男は、委託前に貝輪着裝人骨

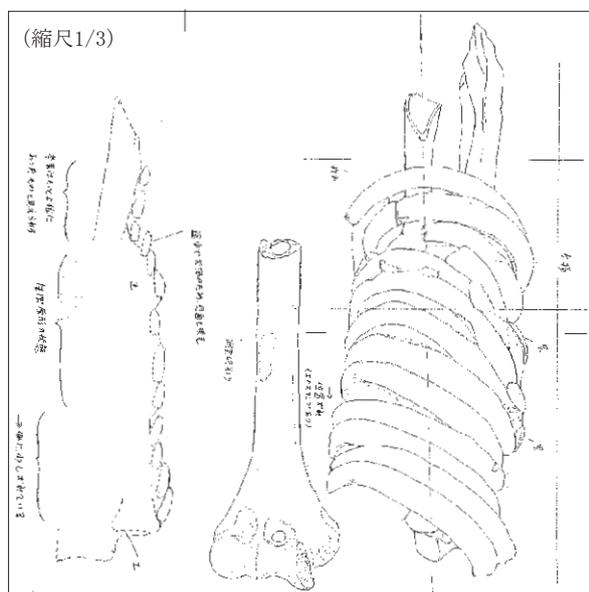


図2 修復前の貝輪着裝人骨

の当時の状況を実測図と写真(図二)で残している。

発掘時に貝輪着裝人骨を撮影した一連の写真も、「藤本弥城先史資料」の中にネガフィルム

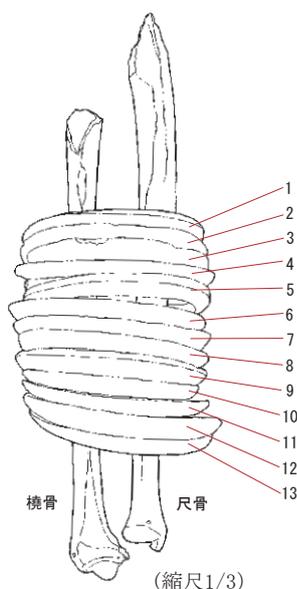


図3 修復後の貝輪着裝人骨

が残されていた。現像してみるとピントの甘い写真が多いが、それでもいくつものことを知り得る。図一と図二(右)の写真と比較すると、貝輪1(貝輪番号は図三左を参照)の状態が異なっている。また、腕骨と尺骨の破断端部が、図一では離れているのに、図二では重なるように接している。修復前の実測図に貝輪1〜3が「本来はもっと上位にあったものと考えられる」と注記されたように、この部分については発掘の際に、人骨の一部とともに貝輪の原位置が動かされたことが考えられた。貝輪13に接して撮影された貝輪の小破片も、本来は貝輪4の破片であって、遊離したそれを全くの想像で置いてしまったのではなからうか。修復前の実測図には、貝輪4の欠損が記録されているのに、修復後には、貝輪4がほぼ全周するように復元されているのである。修復による最も大きな変更は、斜めに倒れていた貝輪が、密着して立てられたこと。これにより、貝輪の連なりが人骨を覆う長さは16.5cmから10cmほどに縮んでいる。人骨については、修復前には重なっていた腕骨と尺骨の遠位端部が並列するように変更された。これは、解剖学的な位置関係の復元としても腕骨の向きが正しくない。以上のように、修復された貝輪着裝人骨の現状は、検出状況をそのまま保存したものでないことを、まずは確認しておかなければならない。

2 貝輪と模造品

貝輪着裝人骨の現状は、検出状況をそのまま

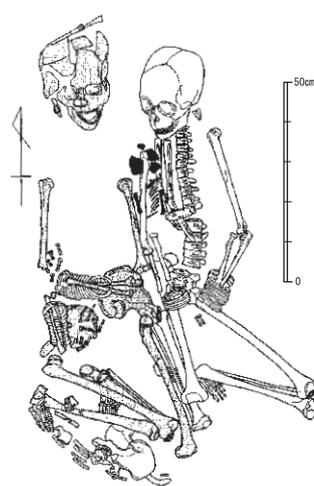
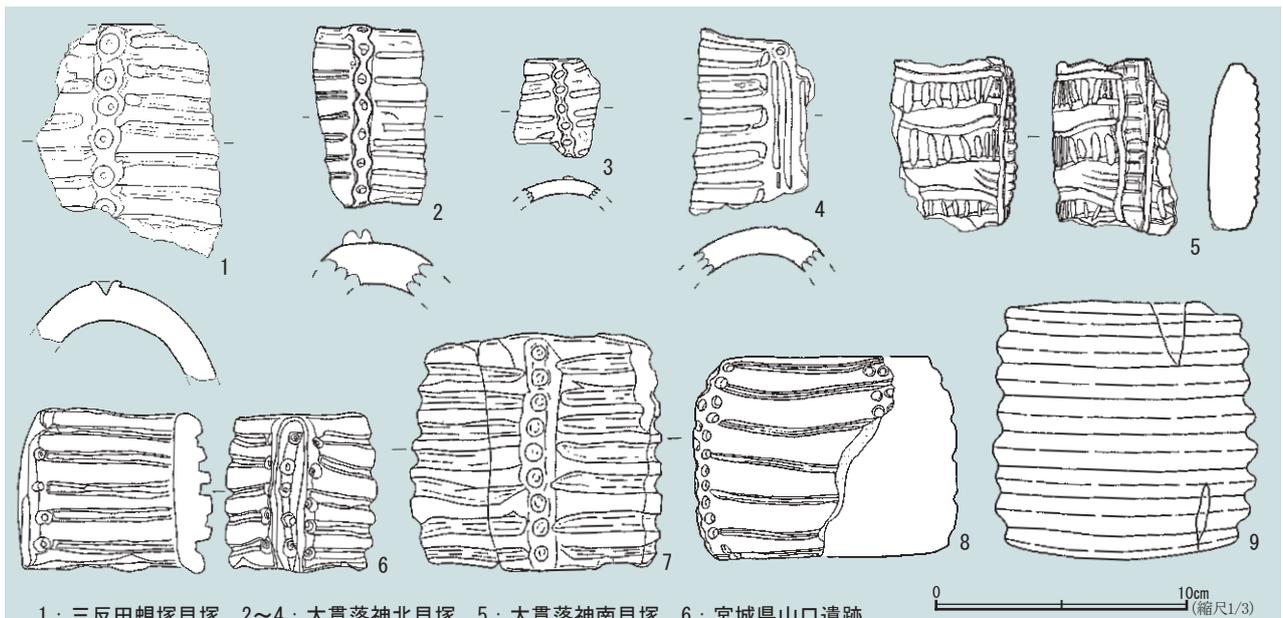


図4 山鹿貝塚の貝輪着裝人骨 (永井他1972より引用)

保存したものではないが、それでもなお、着裝状態の推定復元としての根拠は見出せる。修復前の実測図には、貝輪5〜9が「ほぼ原形の状態」、貝輪10〜13が「位置ずれ(土のスタンプあり)」と注記されている。原位置のままの五点と、原位置の印象が残されていた四点の少なくとも九点は貝輪の向きが揃う状態で検出されたことが確定である。この「貝輪の向きが揃う状態」とは、素材である貝殻の表面―内面の方向とともに、殻頂―腹縁の方向が一致するということ。貝輪1〜4についても、貝輪の向きを異にしていたと考えられるものは見られない。これが着裝状態を反映したものであったと推定されるのである。貝輪の向きが揃う状態は、福岡県山鹿貝塚の埋葬人骨(図四)にも認められている。

貝輪の向きが揃うのは、当たり前のように思えるかもしれない。確かに、着裝するにあたり表面―内面の方向は統一できる。しかしながら、手を通すために準備された貝輪の内径は手首の太さを大きく上回り、手首付近では前腕を軸とした回転が生じる。貝輪を製作し着裝してみれば



1: 三反田蜆塚貝塚, 2~4: 大貫落神北貝塚, 5: 大貫落神南貝塚, 6: 宮城県山口遺跡, 7: 新潟県元屋敷遺跡, 8: 宮城県下ノ内浦遺跡, 9: 栃木県萩ノ平遺跡

図5 貝輪土製模造品

ば、腕を動かすその都度に、貝輪どうしが音を立ててぶつかり合い殻頂―腹縁の方向を変えるのを実感できるはずである。この音を発するのことに意味があったのではないかと想いを巡らしたこともあったが、それでは埋葬人骨に伴う検出状況が説明できない。揃えた貝輪が後々まで全く動かないよう細心の注意を払って埋葬したと見るよりも、貝輪はもともと動かないよう固定して連ねられていたことを考えるべきなのであろう。

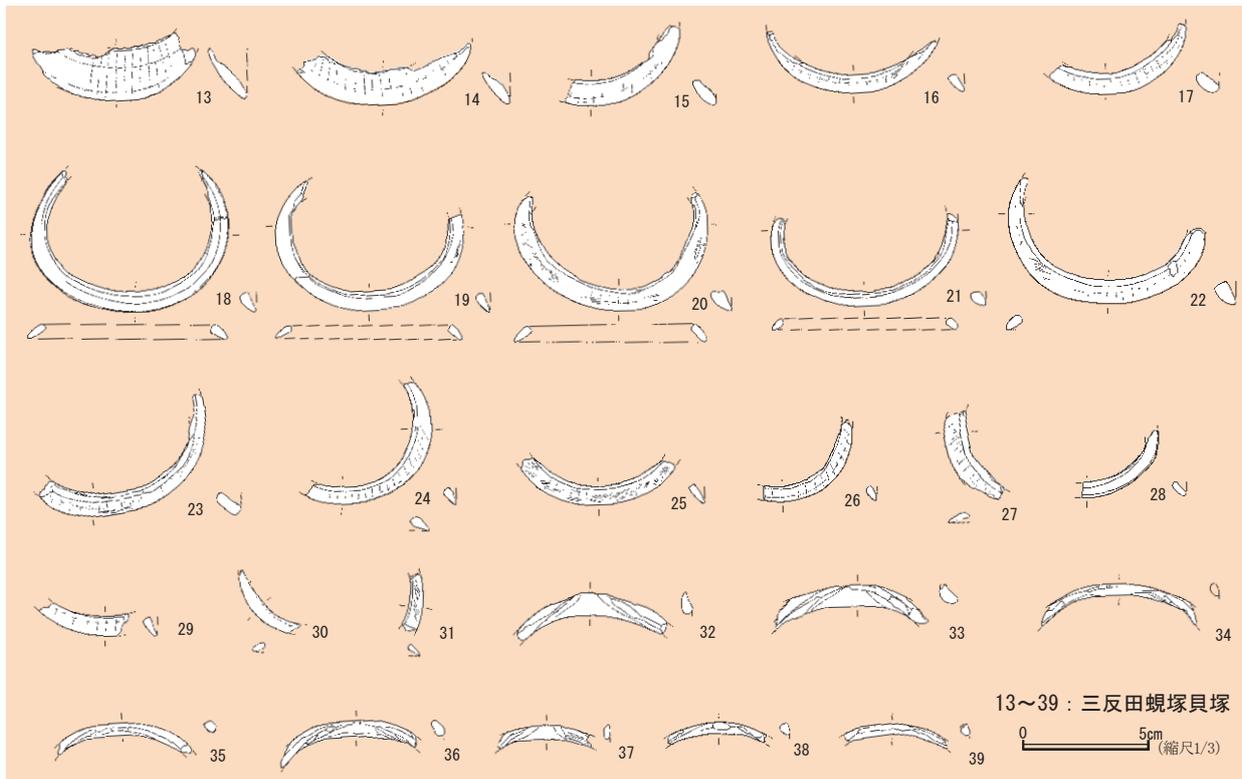
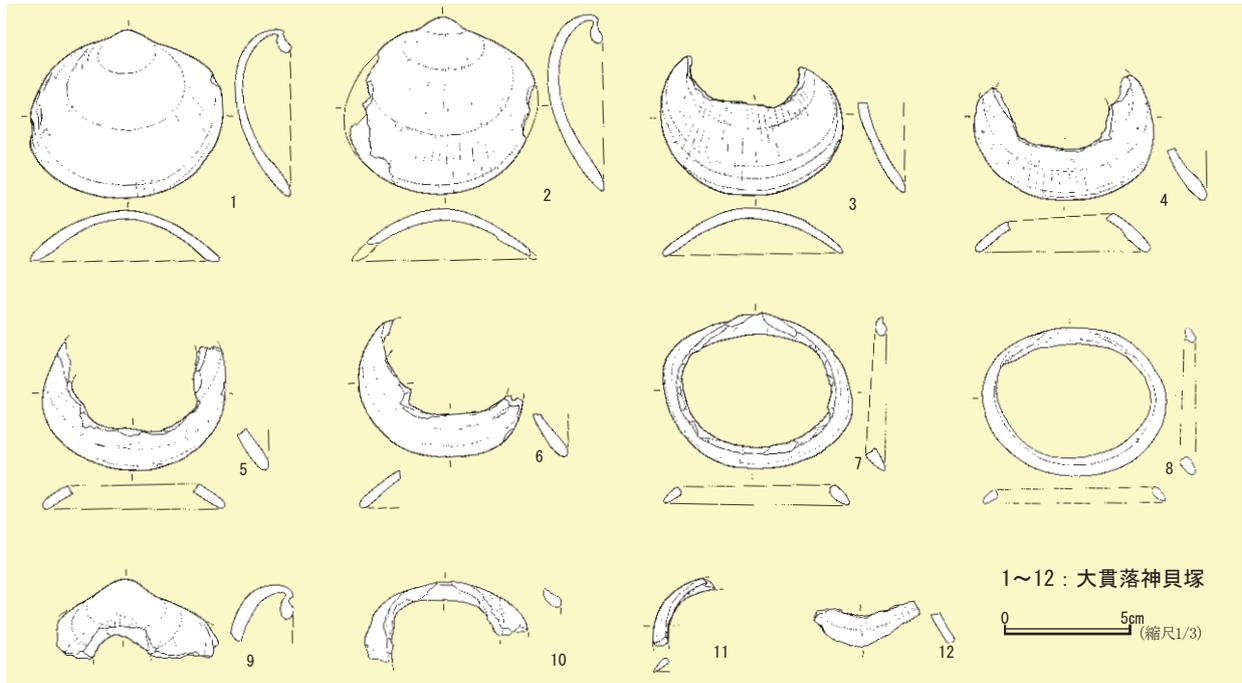
縄文時代後期前葉の関東・東北地方を中心として、貝輪を模造した土製品が報告されている。これを集めた吹野富美夫は、「B・C群」に分類した「円筒形の土製腕輪」を「三反田蜆塚一九六八年調査第四号人骨の装着例のように、複数の貝製腕輪を装着した状態を模造したもの」（吹野二〇〇）と既に考えていた。一方、吉田泰幸は、これを「Ⅲ類：沈線や隆起などで側面に段をつけた形態」に分類し、「半環状・長方形の装飾品を多数組み合わせ、腕飾として装着した状態をあらわした可能性」（吉田二〇〇八）を考えている。「どこどころ円形の刺突文がタテ方向にみられるのがほとんどである」という「Ⅲ類」の属性（図五の1〜8）を、「装飾品に穿孔された孔とみなす」ことが吉田の前提にあり、斎野裕彦による「組合せ式の貝輪をいくつか連ねた状態であろうか」（斎野一九九八）という想定が推し進められた。白色物質を塗布した痕跡が残るもの（9）も報告されており、

貝殻を素材とする製品の色彩までも忠実に模造したことが窺えることから、隆帯や刺突についても模倣により成立したことを考えて良いのである。但し、それは、「組合せ式」ではなく、貝輪どうしを連結するための結縛ではなかったか。紐を編み込むような装飾的な結縛の連なりが、隆帯と刺突で表現された。それは一列（7）もしくは対の二列（6）であり、刺突のみ四列（8）は、模倣が文様化した段階に位置付けられよう。連結こそが、貝輪の向きが揃う状態を埋葬後にも保存した正体であったと考えるのである。

3 貝輪の製作と模造

縄文時代後期の那珂川下流域における貝輪の素材は、ベンケイガイとサトウガイが相半ばして主体を占める。外洋に近い大洗町の大貫落神貝塚^註では、両種の素材から成品に至る製作過程の痕跡が残されていた。ベンケイガイには、素材段階（図六の1・2）、穿孔（3・9）から孔の拡大までの敲打段階（4・7・10）、それに伴う破片（12）、研磨段階（8・11）を認めている。これに対して三反田蜆塚貝塚^註では、敲打段階かとも見られる破片（13・32）がわずかにあるだけで、ほとんどが研磨段階もしくは成品で構成される。素材や製作初期の未成品は確認できず、大貫落神貝塚から三反田蜆塚貝塚へと、貝輪が供給されていたことを想定できる状況である。

近年から貝輪が供給されていた三反田蜆塚貝塚（図五の1）、さらに貝輪を製作していた大貫落神貝塚（2〜5）においても、模造の土製品が



図番号	殻右左	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	段階	図番号	殻右左	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	段階	図番号	殻右左	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	段階
1	L	67	75	40.9	素材	14	R	*19	*68	5.5	研磨	27	R	*25	*23	1.5	研磨
2	L	71	*73	44.6	素材	15	L	*33	*45	4.2	研磨	28	R	*26	*31	1.2	研磨
3	R	*56	72	22.2	敲打	16	L	*24	*66	3.4	研磨	29	—	*13	*36	1.8	研磨
4	R	*50	71	19.9	敲打	17	R	*28	*54	4.9	研磨	30	—	*25	*25	0.7	研磨
5	L	*52	72	18.4	敲打	18	L	*58	79	7.1	研磨	31	L	*23	*8	0.6	研磨
6	R	*57	*64	14.4	敲打	19	R	*53	74	6.0	研磨	32	R	*18	*59	2.9	敲打?
7	R	63	75	12.4	敲打	20	L	*47	75	7.7	研磨	33	R	*18	*60	4.9	研磨
8	R	59	73	10.8	研磨	21	R	*49	77	10.0	研磨	34	L	*17	*62	1.8	研磨
9	L	*32	*64	18.1	敲打	22	L	*37	74	4.9	研磨	35	L	*13	*53	2.8	研磨
10	L	*34	*64	7.5	研磨	23	L	*48	*66	7.2	研磨	36	R	*19	*54	3.3	研磨
11	R	*26	*26	1.1	研磨	24	L	*49	*50	3.2	研磨	37	R	*9	*37	0.9	研磨
12	—	*16	*41	2.9	剥片	25	L	*19	*61	2.1	研磨	38	R	*9	*39	1.1	研磨
13	L	*27	*64	6.7	敲打?	26	L	*33	*36	2.1	研磨	39	R	*10	*41	1.1	研磨

・「長さ」は殻高方向の計測値、「幅」は殻長方向の計測値、「*」付数値は残存長。「段階」は製作段階。

図6 大貫落神貝塚と三反田蜆塚貝塚におけるペンケイガイの貝輪製作

出土している。模造品が製作される背景には、供給を超えた需要があり、実物の入手が困難なことを理由として考え易い。確かにオオツノハを素材とする貝輪は、那珂川下流域でも稀少であり、縄文時代中期後葉の上ノ内貝塚では実物、直近の君ヶ台遺跡^{きみがだい}では模造品が出土している。しかしながら、三反田蛄塚貝塚における貝輪着装人骨と貝輪土製模造品の共存は、供給の事情ではなく、ベンケイガイの貝輪を連ねた着装の方に、何らかの規制があったことを示唆しているのではないかと考えるのである。

註一 『那珂川下流の石器時代研究Ⅰ』に掲載された写真図

版では、一部の骨の向きが変更されている。この写真図版は、現地で骨の向きを変えて撮影されたものではない。「藤本弥城先史資料」として遺されていたネガフィルムを現像してみると、撮影されていた写真から骨の部分を取り抜き、それを別の写真に貼付し、これをさらに撮影するという手順で製作されたことが判明した。写真を撮影した写真には、被写体の写真の端部と下地(A)が写り込み、貼付による段差の影(B)も明瞭である。おそらくは藤本弥城が、報告を作成する段階になって、これが上腕骨の遠位端を含む破片であることに気付いたのであろう。その意図は、橈骨・尺骨との位置関係を直すことにあったのかもしれない。しかしながら写真と実測図(図二)からも明らかのように、これは、「左上腕骨」(藤本一九七七)ではなく右上腕骨であり、左の橈骨・尺骨とはそもそも関節しない。埋葬状態の上半身を失うことにな

なった攪乱により、解剖学的な位置を大きく移動した破片と考えるべきなのであろう。



▶A

▶B

註二 二〇一〇(平成二二)年四月二〇日の茨城放送「ホト

トで考古学」「ベンケイガイの貝輪」において「縄文時代にも、祭りの場で舞踏、つまりダンスが演じられたことを想像してみると、この貝輪が出す音が効果的な演出の一部であったことを考えたくありません」という発言をした。本稿では、これを撤回する。なお、当日のシナリオは、『笑う埴輪』(二〇一九 私家版)に収録してある。

註三 栃木県藤岡神社遺跡では、貝輪土製模造品に付着し

た白色物質についてX線回析分析が実施された。「素材は燐灰石 (apatite)」と判断され、「仮に意図的な塗布であるとすれば、骨や歯などの生物起源物質を利用したとみられる」ことが考察されている(パリノ二〇〇二)。但し、藤岡神社遺跡から出土した貝輪土製模造品は、オオツノハを素材とする貝輪を模造した形態のものに限られるようである。土器や各種の土製品の胎土も分析されてお

り、貝輪土製模造品の胎土の特徴は土器に共通することが報告されている。貝輪土製模造品が各地で製作されていたとするならば、模倣の原型である貝輪もまた流通していたことを考えて良いのであろう。

註四 藤本弥城先史資料の大貫落神貝塚資料から、未報告を含め所在が確認できたものを実測して掲載した。既報告(藤本一九八〇)で所在が確認できないものもあり、さらに大洗町大貫台地埋蔵文化財発掘調査会による発掘資料(井上他二〇〇〇)がある。

註五 藤本弥城先史資料の三反田貝塚資料及び市教育委員会による発掘資料から、未報告を含め所在が確認できたものを実測して掲載した。

参考文献

- 斎野裕彦一九九八『アクセサリーの考古学』地底の森ミュージアム平成一〇年度企画展 仙台市富沢遺跡保存館
永井昌文他一九七二『山鹿貝塚―福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚の調査―』山鹿貝塚調査団
パリノ・サーヴェイ株式会社二〇〇一『藤岡神社遺跡の自然科学分析』藤岡神社遺跡(本文編)栃木県教育委員会・とちぎ生涯学習文化財団 四九七・五三三頁
吹野富美夫二〇〇〇『縄文時代の土製腕輪』『常総台地』一五・六七・八三頁
藤本弥城一九七七『那珂川下流域の石器時代研究Ⅰ』(私家版)
藤本弥城一九八〇『那珂川下流域の石器時代研究Ⅱ』(私家版)
吉田泰幸二〇〇八『縄文時代における「土製腕輪」の研究』『古代文化』第五九巻第四号、二三四頁

【参考資料を引用した報告書等については省略した】

文 埋センターの 日々 2019 後期

10月

2 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
第21回企画展「霞ヶ浦の誕生と貝
塚」へ資料貸出【三反田貝塚貝塚縄文土器
ほか】



山梨県立博物館企画展「文字が語
る古代甲斐国」へ資料貸出【武田遺跡
群墨土器】/「台風被害」



5 銚田市社会福祉協議会なごみ会
見学 / 大賀克彦氏(奈良女子大学 資料
調査(磯崎東古墳群ガラス玉類) / 「ふる
さと考古学⑧」「さわって楽しい考
古学」(講師・広瀬浩二郎氏) / 二
奈良文化財研究所飛鳥資料館視察

10-19 市毛下坪遺跡試掘調査(14
次) / 16 市毛上坪遺跡本調査終了
(25次) / 23-26 岡田遺跡試掘調査
24 岡田遺跡本調査開始 / 中根
小学校1年生&たんぼ保育園ど
んぐり拾い



27 小林高氏(千葉市埋蔵文化財調査セン
ター)資料調査(本松遺跡有角石器)



ふるさと考古学⑨「プラミッドを
つくる」(講師・三井猛氏 梅田
由子氏) / ワンケースミュージア
ム47「古墳時代の杯」市内遺跡調
査2017「開始」サイクリングDE
ひたちなか2018 / 群馬県「歴
史の杜」見学 / 30 君ヶ台遺跡試掘
調査開始 / 31 『埋文だより』第49
号発行

11月

1 虎塚古墳一般公開 / 2 君ヶ台
遺跡試掘調査終了 / 4 ふるさと考
古学ふるさと考古学⑩「文様の考
古学」(講師・稲田健一)



クラブツurisム見学 / 6 勝田三
中職場体験 / 7 9 地蔵根遺跡試掘
調査 / 8 二虎塚古墳一般公開 / 8
阿字ヶ浦小学校6年生社会科見学



13 16 松原遺跡試掘調査 / 16 岡
田遺跡本調査終了 / 17 ふるさと
考古学⑪「フィールド探検」(講師・
矢野徳也氏)



虎塚古墳
花便り

22 ウラシマソウ

今回ご紹介する花は、以前ご紹介したムサシアブミによく似
たウラシマソウ(浦島草)です。ウラシマソウはサトイモ科テ
ンナンショウ属の植物です。写真のように太い茎が直立し、そ
の先に葉がきます。茎の途中から花柄を出し、褐色の仏炎苞
がみられます。仏炎苞の内部からは、付属体と呼ばれるものが
外へ長く伸びています。この付属体を浦島太郎の釣り糸にみな
すことが、ウラシマソウの名前の由来とされます。大きさは三
〇〇六〇cmで、四〜五月頃に咲きます。

虎塚古墳周辺で、ウラシマソウは写真の一本しか確認してい
ません。ただ、毎年同じ場所に咲くので、四月に咲いたかどう
かを確認するのが楽しみです。同時に、釣り糸に獲物?が釣れ
たかどうか確認していますが、毎年ホウスですね。(稲田健一)



2015.4.23

20-22 田宮原一遺跡試掘調査 / 21 群馬県前橋市文京町三丁目自治会見学 / 27 市毛上坪遺跡本調査開始(26次)

12月

2ふるさと考古学⑫「とても楽しい考古学」(講師・さかいひろこ氏) / 4 茨城キリスト教大市民講座見学 / 4-5 市毛下坪遺跡試掘調査(15次) / 4-7 市毛下坪遺跡試掘調査(16・17次) / 二山梨県立博物館より資料返却 / 12 上高津貝塚ふるさと歴史の広場より資料返却 / 16 ワンケースミュージアム47終了 / 18 市毛上坪遺跡本調査終了(26次) / 26 市毛上坪遺跡本調査開始(27次)

1月

14 ひとちなか市史跡保存対策委員会 / 22-25 市毛下坪遺跡試掘調査(28次) / 25 市毛上坪遺跡本調査終了(27次) / 2月 / 3 水戸ウォーキングクラブ見学 / 5 市毛上坪遺跡本調査開始(28次) / 9 第16回企画展「縄文時代の装身具―茨城県北部の資料―」開始 / 9 ひとちなか市の考古学第12回①「縄文時代の装身原理」(講師・山田康弘氏)

ゆきだるま



「3イタリヤから見学」



13-19 向野A遺跡試掘調査 / 14 岩宿博物館より資料返却(鷹ノ巣遺跡箱先形尖頭器ほか) / 15 大里美穂氏(茨城大)資料調査(津田遺跡蔵骨器)



16 ひとちなか市の考古学第12回②「縄文時代の装身具―大珠と耳飾りを中心に―」(講師・上野修一氏) / 19-26 蛸塚西貝塚試掘調査 / 21 東京都大田区立博物館資料借用継続手続(東中根遺跡炭化米) / 23 ひとちなか市の考古学第12回③「幻の貝 オオツタノハを追う」(講

師・忍澤成視氏) / 24 水戸ボーイスカウト見学 / 28 諸星良一氏(東京産業研究所)資料調査(後野遺跡細石刃ほか)



3月

2 ひとちなか市の考古学第12回④「絶滅巨大鮫メガロドンの垂飾り」(講師・鈴木素行) / 3 歴史探訪ウォーク / 8 市毛上坪遺跡本調査終了(28次) / 12-13 大平A遺跡試掘調査 / 12 國木田大氏(東京大)資料調査(鷹ノ巣遺跡炭化種子ほか) / 14 平成30年度市内遺跡発掘調査報告書発行 / 『三反田遺跡第7・8次発掘調査報告書』発行 / 28-31 虎塚古墳一般公開 / 31 『埋文だより』第50号発行

入館者状況 (2018.10.1.~2019.3.31.)

月	開館日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
10月	26	145	5 (0)	204	(0)	349
11月	26	1557	7 (3)	147	(22)	1704
12月	23	103	3 (0)	77	(0)	180
1月	23	75	2 (0)	37	(0)	112
2月	24	149	6 (0)	176	(0)	325
3月	27	846	4 (0)	117	(0)	963
合計	149	2875	27 (3)	758	(22)	3633

(0)内は学校数

ひとちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひとちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『ひとちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
http://business4.plala.or.jp/h-lcs/

編集後記の 笑う埴輪

今号には北海道のアンモナイトを掲載した。前号の「トイレのリニューアル」にもアンモナイトのパネルを写し込んでおいたのだが、お気付きだろうか。このアンモナイトは、市内の平磯海岸に露出する白亜紀の地層から産出したデイデイモセラス。そこが男子の個室であることは、センターを来訪した者にしかわからない。ごく部分的な破片であったことも、連想が膨らむのをくい止めたのだろう。

個室の中で造形の再現に挑戦しようとするなら、デイデイモセラスよりも、ニポニテスの方がさらに難度が高い。異常巻きアンモナイトの極みか。巻き方のメカニズムが解明されているというので、検索をすれば論文に辿り着けることだろう。論文を読み込み、孤独な試行錯誤の結果に、もし再現に成功したとしても、報告には及ばない。『勝田市文化会館友の会だより』『フィールドノート』『ひとちなか埋文だより』の三〇年にわたる「笑う埴輪」の戯言とともに、どうか水に流してほしい。

お叱りを受け

る前に、そろそろ幕を下ろすことにしよう。深く頭を垂れながら、ごきげんよう、さようなら。



ニポニテス



ひとちなか埋文だより 第50号

編集 公益財団法人ひとちなか市生活・文化・スポーツ公社

2019年3月31日発行

発行 ひとちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひとちなか市中根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷